

発達とカリキュラム



坂元彦太郎

△1▽

発達と「カリキュラム」すなはち、ことともたちが実際にどう発達していくか、と、園でどういうように教育していったらいいか、との関係は、すでに論じつくされたといつてもいいくらいの古い課題であるが、おそらく、今までばかりでなく、将来においても、決定的な結論はうまれないであろう。結局は、論者それぞれの立場や性格や見方によつてきまる、という外はないかも知れない。

しかし、どうした、それそれに異なる考え方を分類したり、配列したりすることはできないことはない。そして、その系列なり分類の中に、自分の考え方を位置づけることは可能である。そのことが自分の考え方の根柢を見つけることになるかも知れないであろう。

一方の極端には、学校（幼稚園などを含む）で授けることがらは、つまりは、りっぱな成人としてのぞましいことがらであるとし、で、きあがった教育内容を割りふりしてカリキュラムをつくる、といった立場の人がある。いいかえれば、被教育者の実際の発達に応ずるという考えを最小限度にちぢめて、教育の内容それ自身の組織にほどんど全面的にたよろうとするのである。たとえば、幼児のことや園の実情をほとんど問題にしないで、人間として必要なことを、ただ程度を下げる身につけさせようとする人たちである。いわば、人間として理想的なことをできるだけ早く授ける、といった考え方があるるのである。

大ざっぱにいえば、教育についてのこういう考えはずつと古くからあつた。これに對して、近頃になって、児童を尊重する風潮が生

れるとともに、教育心理学などの発達とともに児童の実情への理解が深まってきて、児童の心身の発達が学校などにおける教育内容を決めるに大きな影響をもたねはならない、という考え方につよ

まってきた。そこに「児童中心的な」進歩主義ないしは経験主義なカリキュラム觀までが生まれ、こどもたちの興味・関心や、能力などの発達段階にふさわしい教育活動を展開しようとの企てがここに

みられてきた。かくて「旧教育的」な極に対し、それと対立するような、こどもの実際の発達をそのままならべればカリキュラムになるようなのや、こどもの具体的な生活の展開をそのままカリキュラムとする、といったやり方が、生れてくるようになつたのである。

こうした両極の間に、実際にはさまざまの段階のものがならんでいるのであるが、この両極は、別のことばでいえば、社会の要求を重んずるか、児童の要求を重んずるか、によるかたよりである。元来、教育のことを考えるとき、この両面からの要求がみたされるということが、少なくとも最後的には必要であろう。さまざまな事情や条件によつて、そのうちのいずれかの方向にまず出発するのはやむをえないであろうが、しかし、ある程度までいたところで、別の方のことをかえりみるのがしぜんな成り行きであろう。そして、その両面の適切なバランスに至るのであるが、この落ち着いた地点もまた、人により場合によりそれぞれにちがいがあり、そして、そのままに認められていいく場合が多いであろう。

八2▽

今までのは一般的に学校教育のことをいったのであるが、幼児教育の場合として、そして、私のもつ考え方につと、問題はずつと限定されてくる。

幼児教育に関心をもつということは、幼児が現在ある発達のすがたを無視したり軽視したりはしない、ということである。学校教育法でも、幼稚園の教育目的を「一口でいえば『幼児の心身の発達を助長する』ことである」としている。幼児は小型の成人や、少年少女の縮写でもなく、やがては開展してそうなるではあるが、幼児特有のすがたをもつており、しかも、速く変化している。それでいて、おそらく、成人に花咲くさまざまの面へのめばえを隠密のうちに藏しているであろう。いまの幼ないありさまから、したいに変り伸びていく経過は、人により、場合により、また部面によつて、実際にさまざまであろう。この神秘の全貌をきながらにつかまえることは、至難のわざである。現代の実験的な発達心理学は、ごく一般的な事実や理法の一端を明らかにしてくれた。その業績はまことにありがたいものではあるが、こうした発達の深層が、もらずところなく明るみに出されたわけでもなく、また、時代の推移とともに、幼児の発達そのものが変りつつあることも否定できない。だから、児童心

理学の現在の成果を尊重しながら、それだけにはとらわれない、といふことが、ことに幼児の発達の場合には、ここに思えておかねばならないと思う。いいかえれば、幼児の発達に応するということを、單純に、既存の幼児心理学の本に書いてあるがままにひたすら頼る、ということに置きかえるのは危険である。一方では、できるだけ新しく正しい研究に耳を傾けながら、幼児に接している自分自身の日常の体験において幼児たちのさながらの姿を身をもつてつかよえることにつとめなければならない。

よくいわれるよう、教育であるからには、あるのそよし地点へ幼児をひきあげることであるにはちがいないが、その地点が現在の地点とどのくらいへだたつところにあるか、といふことが問題なのである。ひじょうに高く、途中にいくつかの段階をとおらなければならぬようなことを、一足とびに要求するには無理である。しかし、ことものことがよくのみこめていないために、自分ではそのつもりでなくとも、知らずしらずの間にこのような無理をおかすことが少くない。

いま、へだたりといつたことばを使ったのであるが、それから連想されるような、單なる程度や分量だけのちがいではなく、質的な飛躍を意味することさえある。しかし、そうしたへだたりが、現在の地点からは相当あるように見える場合でも、幼児の内部にその機が熟していて、その飛躍ができてしまう、ということはないではない。

いゝ要は、ひとりひとりの幼児の現在の段階を、それが包んでいる可能の方向をも見抜きながら、さながらにつかまえるように、不斷の努力をはらっていかなければなるまい。

△3／

こどもの発達を重んじる、すなわち、こどもの現在の能力や成熟度を考えあわせる、といながら、かえつて奇妙な無理をおこしてゐることに付かない人たちがある、と私は思う。すくなくとも、園の教育課程というものを考える角度からすればである。

たとえば、このごろの幼児は身体的にだけでなく、知的にも以前よりは発達が早くなっているのではないか、と思われる。文字を覚えていいる子がひじょうに多くなったし、数えることも、もうできるようになつてゐるといふ。たしかに、このことは疑えない事実のように私も思う。

だから、幼稚園の教育課程の中に、教を教えたり、文字を教えたりすることをはつきり入れるのがいいのだ、と主張する人がずいぶん多くなってきた。だが、そういうかんたんな論理で、こういう事態が処理できるかどうか、もし、さまざま条件や問題を考え合わせてみなければならぬ、と私は思う。

やらせればちゃんとできるようになつてゐるから、やらすべき

だ、というだけでは問題はかたへることはできまい。幼児には、実はおそろしいほどいろいろなことをやればできるような能力が認めざめかけている。したがって、大切なことは、そのうちのどういふ部面をどのようにのばすように仕組むか、ということである。教育課程にまともにあげるものについては、全体としてのそましいバランスがとれるように、考慮をはらわねばならない。

その際、ひとり前の人にとして見えねばならないものをとりおとしなく盛りこむこともたいせつであるが、そのためにも、現在の幼児の段階で、園のような生活としては、どういう面が欠けてはならないか、また、それにもたせる重きをどのくらいにしたらいいか、頭におかねばならないであろう。どう考えてみると、文字や教について重みをおいた努力を重ねるよりも前に、幼児たちには是非となままでおきたい生活部面がある。幼児にふさわしい心身の活動を十二分に發揮させること、いうなれば、幼児期のときに心ゆくまで経験させておかなければ、のちの健全な発達に支障があるであらう。ような方面的の経験をできるだけもたらせるようにしたい。たとえば、元気いっぱいにあはれまわつたり、想像を自由にはせめぐらしたり、幼児らしい遊びに没頭させたり、といったことを、弱めたり、欠かしたりしないようにしたいものである。

それに、いっそう気になることは、もし、文字や数の計画的な教育を「カリキュラム」の中にのせると、ともすれば、ちょうど普通

の小学校でやるようなやり方で、一齊に、頭から教えるもうとするようになるけはいがあることである。そつすると、いっそう、いま私が述べたような活動をおしのけてしまつおそれがつよくでてくるのである。

さらに、小学校におけるそれらの系統との関係もあって、真正面からカリキュラムの中心的位置にこれらをもつてくることは、私はのそましいとは思わないのである。

しかし、こどもたちがそういうことができるようになつてゐる場合かひじょうに多いことを否定しはしない。だから、しぜんにこどもたちがそういうものを身につけるのをははむどころか、適切なところにおいて、ひとりひとりに指導を加えることが大いにあっていい。ことに、教と実物との対応などについては、機を見て経験をふかめておかねばならないであろう。むろん、幼児に無理な飛躍や負担を強いないことを常に心していなければならぬ。

以上、発達とカリキュラムとの関係について、私の考えている一端を述べたが、これで尽きるものでないことはいうまでもなく、さらに、その外のいろいろな立場が成立しうるであろう。私のいいたことの一つは、おなかよく自分の立場をぶりかえつてみて、それなりに適切なバランスに到達するように努力をしたいものだ、ということである。